現代日本キリスト教文学全集 10 「母性と聖性」

定価1200円

著者 田中千禾夫・遠藤周作・田中澄江
曾野綾子・三浦朱門・椎名麟三

発行者 武藤富男

発行所 株式会社 教文館
一〇四・東京都中央区銀座四―五―一
振替・東京一一三五七・電(五六一)八四四六

印刷所 伸光印刷株式会社

昭和四八年 九月二〇日 初版発行

乱丁・落丁はお取り替えいたします

© 1973

配給元 日キ版 東京都新宿区新小川町3―1 振替・東京60976
電話 (260) 5664 (代)
0393―625100―6100 (日キ版)

# 母性と聖性

現代日本キリスト教文学全集

10

教文館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

# 目次

マリアの首……田中千禾夫……五
母なるもの……遠藤周作……七三
長崎の緋扇……田中澄江……一〇三
冬の油虫……曽野綾子……一一九
胡桃……三浦朱門……一三三
母の像……椎名麟三……一五一
解説……上總英郎……一六五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

裝幀　熊谷博人

# マリアの首　四幕九場

――幻に長崎を想う曲――

田中千禾夫

**登場人物**

忍
鹿
静
第一の女
第二の女
第三の女
第四の女
マリアの首
三つの女の声
次五郎

矢張（やばり）
桃園
巡査
第一の男（船員ふうの黒人）
第二の男（半白の老人）
第三の男（マントを着た義足）
第四の男（役人ふうの壮年）
第五の男（やせた若い男）
坂本医師
聖人立像

# 第一幕

## 第一場　合同市場の二階

冬の夜。

ゆるやかにギターを弾く音。小蒸気の鋭い気笛が、山々に囲まれた港のなかで反響しながら、港の眠りを深める。鹿の部屋。

といっても、実は物置用の空部屋である。（この合同市場の輪郭については次の場と合わせて眺められたい）。四方、粗い板壁。その一つに打ちつけた棚の上の小さな鏡と風呂敷包み。隙間をふさぐのにはったカレンダーの絵が唯一つの飾りであろう。蜜柑箱を並べた上に薄べりをしき、その上にふとんをのべただけの即席のベッド。いす一脚。床に小さな電気ストーブ。外からコードをのばして吊った薄暗い電球がすみにぶら下がっている。

その反対のすみにどこからはずして持ってきたのか一枚の扉がたてかけられ、更にその上から、よごれた唐草模様の大風呂敷がかかっている。

今、シュミーズの上にひきずる着物をひっかけた鹿が、正面の扉を半ばあけ、外に向かって立っている。真白いほどの濃い化粧。左の耳が悪いのか、黒い耳繃帯をし、それが顎にまでかかって不気味である。豊かな肉付きの円顔で、むしろ美人のほうであり、暗い目が妖しく光る。その声もまた、しわがれて低音である。

鹿　（こってりと）またきてくれまっせね……きっとばい……なんへ？　なん……ふふ……やん、すけべ！

扉をパタンとしめる。その扉に墨で無造作に十字が大きく書きなぐってあるはずであるが、その扇にもたれてしばらく外の音をきき、腕をあげてあくびをする。腋の下の細長い小さな縞は、明らか

に手入れをして残したものだ。
次に片手に握った何枚かの札を改めて勘定し、ふとんの下から紙入れを出してなかにしまう。鏡の前に行き繃帯の工合をみる。最後に、電気のスイッチをひねり、着物を脱いで寝台にもぐりこむ。

## 第二場　合同市場の玄関

同じ夜。
ギターを弾く音が激しい。
取りこわしも近い古びて荒れたバラックの合同市場の柱廊のある玄関。正面の板の二枚扉はしまっている。漬け物の一斗樽などがころがっている。この扉から少しあいだをおいて、ガラス入り（といっても今は半分こわれている）の狭い扉があり、二階にのぼる階段が見える。
裸の電球が正面扉の上に冷たく光っている。
このバラックと三尺ほどの露地をおいて公衆便所。その後景は盛り上がった石垣で、石垣の向こうは、それから約三メートルほどで港に達する川。きたなく濁った川というより溜り水である。三四隻の機帆船の煙突や、標識灯をかかげた緑の帆柱が折り重なるようにして見える。
さて、
黒いマントを着た忍が、柱廊の柱の横にシルエットで立っている。顔はよく見えないが、（実は美人ではない）。髪を短く裁る。胸のまえで、駅の立売りのように、箱が紐で顎から下がっている。小蒸気の鋭い気笛。
音もなく、第一の女が現われ、便所の壁にもたれて何気なきかのごとく煙草を吸う。安物の外套にサンダルをはく。
反対側から第一の男が出て来て、忍の前にたつ。箱のなかを覗く。「けずぎ、りやすやはたえ、どるさんだどるさんな、あう……るぎゃるだるう……」低い声で何か聞いているらしいが、以上のようなひびきがするだけで、よくわからない。フランス語かもしれない。この間、第一の女は、煙草を捨て身をひそめるようにしてこのほうを注視する。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

次の忍の懸命の答も左のごときである。「ししもちぎだり、だり……ぬばどるさんだどるさんなあえ……かかいもすねぐりさすべすうを……」黒人はポケットから四五枚の札を出して箱のなかに入れる。忍は、あたりを見まわしながら、後の小さなほうの扉をあける。「ししもちぎだり……」。

黒人、階段を上がって行く。

始終を見届けて、第一の女は姿を消す。

忍、再び初めの姿勢に復す。

二階に暗い灯がついた。

学生服の矢張が誰かを探しながら出てくる。ちらと忍を見るが、行ってしまう。

忍　（声は美しい）

今夜もあたしは立っている。
銀行の前の荘重な大理石の、
すべっこい白の大理石、
なまめかしく冷たい石の柱の
侍女のように立っている。
でも、しかし、
スカートの下には白鞘の短刀、
預りもののこの刀、
元の持主に返すべきこの刀。
しのぶ、しのぶ、
しのぶとはあたしの名。
あの男を見たら、そっと近寄り、
ぐさっ！　持主に返すのだ。
うーっ！　（深い溜息のように）
そのとき、しのぶ少しも騒がず、
ふふ……ふふ……（なまめかしく）
目の色、顔の色、常と変わらず、
何か道でも聞くように、
近寄り、聞いて、まともに、
肚と肚とをつけ、
突いた……離れた、
そしてまた道を行く。
道の上の小石のように、
あたしは偶然を圧し殺し、
無数、無限相対の道を通して、
あたしはふくれ、ひろがり、

あたしの実在のなかに霧のように散る。
ああ！　あたしはあたしの必然を、
絶対を消したい……消したい、だのに、
だのにそれを邪魔したもの、
何物かをあたしに預けた男、
断わりなしに預け去った男、
あの男が憎いのだ。
だからあたしが、
あの男を殺さねばならぬ、
消さねばならぬ。
あたしに刀を預けたもの、
あたし以外の必然を教えたもの、
あたしは与えることを知らぬ女ゆえ、
殺さねばならぬ。
あたしの受取り人はあたしだ。
あたしの肚の血のぬくもりで
温められたこの刀、
相手の血の温かさで冷さねばならぬ。
火のような冷たさだ！
あたしの心は嬉しさに慄え、

あたしの手はぎゅっと、

黒足袋に下駄をはいた第二の男が、少し前から現われ、そっと忍のほうを見ながら聞いていた。筒袖の黒い着物は、まるで歌舞伎の黒衣のようだ。帯に手拭をぶら下げ、小脇に弁当箱の包をいだく。その痩身は孤独に染みているが、目の底の色はまだ明るく輝くこともある。
このとき近寄って、やさしく声をかけた。

第二の男　売れたですか。
忍　（身がまえる）
第二の男　（微笑して）え、売れたですか。
忍　（首を振りながら後退する）
第二の男　（それを追いながら）どっちもですか。
忍　（やにわに第二の男の頸をつかんで、電気の光の下に持って来る）
第二の男　ちょ、ちょ、ちょっと……。（抵抗しない）
忍　ちがう。（突き離す）
第二の男　（頸をなでながら）燃えたごたる、ここが。

忍　何の用へ。

第二の男　わしの欲しかとは、その小箱のほうじゃなか。この詩の本です……（箱のなかから薄い小冊子をとり上げ）こっちのほうたい。ほう、第二号。

忍　ああたは、誰へ。

第二の男　わしかね。この頃、県庁の宣伝広告の注文で活版屋は忙しかです。組合との果たし合いたい。そるにまた、平和の願い、母の願い、何々事件の訴え……おかげで残業つづきですばい。（両手の指の先を眺めながら）初めは大きくやっとったですが、ああ、三十五年ですけんなあ！　この灰色の硬い指先。指紋も大方消えて見えんごたる。万年植字工ですよ、活字を拾うつまらん役ですよ、わしは。

靴音がゆっくり近づく。第二の男は急いで小冊子に読み耽けるふりをする。
肥った中年の巡査が歩いてくる。

忍　（愛想よく）今晩は。

巡査　今晩は。もう遅かばい、今夜は。

忍　はい。

巡査　どうだな、旦那は。少しはよかかな。

忍　さあ！

巡査　赤ちゃんもさびしがっつろ。早う帰りまっせ。（去りながら）この辺は危かけんな。

第二の男　友だち。

忍　（あいまいに笑う）

第二の男　さて、三十円でよかっかな、やっぱ。

忍　よかです。

巡査、戻ってくる。

巡査　ちょっと、頼みのあると。例の石泥棒だがな。浦上の天主堂の。

忍　……

巡査　まあ、煉瓦の一かけくらいなら、教育材料として取ってもよかろ。ばってん、

忍　ああ、観光客で記念にて言うて持って行くとげな。

巡査　ばってん、あのマリアさんのからだば少しずつ持っ

てゆかすもんのあるとですよ。
忍　へえ！
巡査　おおかた、骨董品として外人にでも売りつくっとじゃろ。夜になって忍びこんで運んだらしい。こら、悪質たい。そんげんふうの聞き込みのあったら、耳打ちしてくれまっせ、よかね。
忍　はい。
巡査　（去りながら）当節の耶蘇の神さんも楽じゃなかな。原爆におうて顔はケロイドになったり、ひっちぎれたり……。
第二の男　（財布から金を出して）わしはな、「しのぶの短刀」ていう詩が好きですよ。今、おうちが自分でうとうた。
忍　そうへ。
第二の男　おうちが作ったとでしょ。
忍　（首を振る）
第二の男　ばってん。
忍　作者はうちの亭主。
第二の男　ああ、おうちの。
忍　いかんですか。
第二の男　いゃあ。ふふ……わしはてっきり、おうちが自分のことば詩に書いたとじゃろて思うとりました。
忍　どうしてへ。
第二の男　（柱廊を見まわし）そう言えば、こん柱は大理石じゃなかな。
忍　そう。ぬか味噌や野菜の腐った匂いにしみついて、ぼろぼろになった木の柱。
第二の男　まあ、しかし、この詩の主人公はおうち。
忍　うんね、ただの女。女。
第二の男　そうたい。おうちの旦那はきっとよか詩人にちがいなかし、おうちば、うんね、女ばようわかって。
忍　（否定的な身振り）ちがう。
第二の男　そして心の底では、おうちば……。
忍　おうちば？
第二の男　……おうちの方でん、好きじゃろ。
忍　……
第二の男　そうじゃろ。
忍　（皮肉に）笑がとまらんほど喜ぶでしょ、そうと聞いたら。

第二の男　おうちは、名無しの詩人の旦那のために、旦那の詩集ば売っとられるんですな。

忍　はい。うちは立派な詩人だと思うとります。ばってん……寝とりますと。貧血症で。

第二の男　ふーん。やっぱ、原爆で。気の毒か！

忍　あの人は、ばってん、原爆じゃなかて言うとです。

第二の男　そんならなおさら、気の毒か。子供さんは。

忍　（目を伏せる）

第二の男　すんません。いやあ、男のわしなど到底かないまっせん。

忍　なんば感心しとっと。

第二の男　……貞女たな、おうちは。

忍　はい。自分でもそう思うとります。しかしどうしてあたは、あの詩ば知っとっと。

第二の男　それは。

忍　ああ、思い出した。

第二の男　あんとき、おうちは浜町（はまのまち）の銀行の前に立っとった。

忍　はい。

第二の男　こんげんさびしかとこじゃ売れんでしょに。

忍　ふふ……賑っかとこじゃ薬のほうが売れまっせん。

第二の男　ああ、なるほど。わしは無論、詩のごたることはわからんもんです。ばってん、この本自体が好きでな。

忍　この本自体。

第二の男　ああ。半紙に毛筆でしたためて、かんじよりで綴じて、千代紙の赤や紫や緑や金粉で表紙を飾ったこの手作りの本が好きですたい。

忍　……

第二の男　おうちの手かな。

忍　はい。恥ずかしか。

第二の男　なかなかどうして。しっかり習うたお手じゃ。今どき見られん筆のさばきですたい。……どっからどこまでで作ったお人の肌のぬくもりがそのまま残っとるごたる！

忍　これは死んだうちの母の好みです。そう、すべてうちの手垢に滲みとります。うちの血の一たらし、二たらしくらいにはなりましょう。

第二の男　わしは残念ながら貧乏で、人の情を買うことなどできかねる。三十円ぽっちの金で、おうちの情ば買う

つもりはなかとです。しかし、こうやっておうちの声ば、水々しく澄んだ声ば聞き、おうちの目の裏を覗き、おうちの頬の短かか生毛のささやきさえ見分けることのできたら、三十円は安かもんと思うとります。わしに許された僅かな生命の触覚の無礼を許してくだされ。そう、そんげんふうに両眼をかすかにとじ、鼻ば上向けた誇り高いおうち！　失礼は承知しとります。許されたというより、恵みだと思うとります。こう言いながら、自分の卑しさに、わしは……。

忍　恵み？　うちはそんげんもんくれた覚えはなか。

第二の男　そうとも、そうとも。どうか気ば悪うせんで下さい。わしの老先はもう知れたもん。いつ取りこわしになるかもしれんこのマーケットと同様にな。身寄りというて誰一人なし、子供は……二人とも、八月九日の空の光りと熱にさらされて死んだとでしょう。それきり会いまっせん。こういうのは、当時、わしは石炭ば掘れていうて香焼島の海の底に徴用されとったけんなあ。おかげでこのとおり生き恥ばお目にかけとります。希望もなし、過去もありまっせん。

ただしかしですな。島から見たときの紫のきのこ雲はきれか景色でしたなあ。あるだけは忘れたくとも忘れられん、はは……。

きのこ雲が消えると、大ぜいの人がまた集まって、右に行き左に行き、獲物ば狙う山犬のごと、われ勝ちに突き進み、せからしそうに喚く。

忍　そう山犬。牡の山犬。

第二の男　たとえ悪気のあったにせよ、どうしてその者たちば責められよう。どこにも秩序はなか静穏もなか永遠も無論なか……不安が当たり前になってしもうた。このときおうちは、ただ黙って立っとった。黒水仙のごと、闇のなかに光って立った。見事です。黙っとるということはですぞ。

半月前から、わしは毎晩、おうちの前ば通っとります。そっで今夜は思い切って声ばかけてみた。

忍　どうせ行きずりの慰めに。

第二の男　いや、そんげん言わんでくれまっせ。ありがたかとです。おうちはわしにとって、しばし、束の間の恵みですよ。

忍　恵み。

第二の男　はい。どうせ、長持ちはせんでしょ、ふふ……

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co